No.80
30th June 2025

NEWSLETTER

国際音楽資料情報協会日本支部

ISSN 2432-6135
(online)

International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centers, Japanese Branch

第 76 回支部例会報告・第 77 回支部例会予告

【目次】

○第 76 回支部例会報告
講演要旨（末永理恵子）p. 1
傍聴記（都丸敦史）p. 5
○事務局だより　p. 7

第 76 回支部例会報告

【講演要旨】

日本近代音楽館の今とこれから

（本稿は 2025 年 3 月 1 日（土）に行われた例会での発表内容をまとめたものである）

2011 年 5 月に明治学院大学図書館付属施設として開館した日本近代音楽館は、日本の近代・現代の音楽に関する史（資）料のアーカイヴとして、重要な使命を負っている。このたび、その現状について報告し、今後の展望を考える機会をいただいたが、過去から引き継いでいる事柄、資産がたいへん多いため、過去を語るところから始めさせていただきたい。

「今」に至るまで

現在の日本近代音楽館の前身は日本近代音楽財団が運営していた日本近代音楽館であるが、さらにその前身となる資料館があった。その歩みは、音楽評論家遠山一行が中心となって遠山音楽財団を設立し、楽譜、書籍、レコードを受け入れる図書室を作ったところから始まる。中世・ルネサンスの音楽と現代音楽を扱うという大方針のもとで、早い段階から日本人作曲家や洋楽受容にも目が向けられ、山田耕筰の資料を受け入れたのは 1967 年であったし、日本人作曲家の作品資料をマイクロフィルムにおさめる事業の検討を始めたのは 1969 年であった。翌 1970 年には現代音楽の資料収集と日本人作曲家の作品資料収集を目的として、遠山現代音楽研究所が設立され、マイクロフィルム収録事業も実行に移された。収録対象の作曲家を選定して協力を依頼し、資料を借用して撮影するもので、他の図書館や NHK などの協力も仰いだ。この事業により、当館に実物の所蔵がなくてもマイクロフィルムで閲覧できるものが飛躍的に増えた。

日本人作曲家の作品も、1971 年に深井史郎、72 年に橋本國彦、73 年に早坂文雄など、順次受け入れられた。しかしながら、遠山現代音楽研究所への助成金は 1981 年に打ち切られた。この危機の打開を目指して、遠山館長の呼びかけにより、1984 年に「近代音楽館設立準備会発起人会」が開催され、同年に「近代音楽館を設立する会」が発足。中世・ルネサンスと西洋の現代音楽の資料は慶応義塾大学に寄贈され、「遠山音楽文庫」となる一方で、1986 年に「日本近代音楽財団」が発足し、日本の近代音楽資料に限定した図書館が誕生することとなる。その図書館は日本近代音楽館と名付けられて 1987 年に開館した（遠山一行館長、皆川達夫副館長）。資料収集に関する検討は、「資料委員会」として、対象分野に詳しい委員を招いて審議することとした。また、旧東京音楽学校奏楽堂の地下に分室を開室し、1987 年からほぼ毎年 2 回のペースで展覧会を開催した。この展覧会のために行った調査データは今でもレファレンスに活用されている。

ここで始められた新しい事業として、「新聞記事にみる日本の洋楽　明治篇」というプロジェクトがある。1989 年に開始されたもので、明治年間の新聞約 10 紙（外字紙を含む）に現れた洋楽関係記事（広告を含む）を抽出し、更にそれぞれの記事のなかから索引語を抽出してデータベース化することを目的としていた。皆川達夫委員長以下、倉田喜弘委員、中村洪介委員、中村理平委員、増井敬二委員、森節子委員（以上すべて故人）と、音楽館職員であった森本美恵子委員からなる委員会のほか、調査スタッフのべ 30 名が携わり、財団法人アフィニス文化財団、財団法人ローム ミュージック ファンデーション、財団法人偕成会の助成を得て作業が進められた。1997 年に館内公開が開始され、閉館時には、調査スタッフによる調査票作成まで終了しており、毎日、読売、朝日（前身紙を含む）の入力が明治 36 年まで完了していた。

もうひとつ、日本近代音楽財団の日本近代音楽館が始めた事業のなかで特筆すべきものとして、「日本のオペラ・管弦楽作品演奏用楽譜」所在調査が挙げられる。1989 年に着手され、アマチュアを含む日本のオーケストラ、歌劇団、放送局、音楽大学等 292 団体に声をかけて、108 の回答を得た大事業であった。利用者には代行検索で対応するもので、その後、日本オーケストラ連盟のライブラリアン会議からの要望をうけて、2009 年 3 月にデータ更新のための調査を開始、同連盟の会員を中心とした 35 団体からの回答をまとめて 2010 年 3 月に完成、日本オーケストラ連盟にデータを納めた。この直後に音楽館は閉館したので、納めたデータのメンテナンスは同連盟に任せることとなったが、その時のデータは現在でもレファレンスに活用している。

一方、事業を引き継いで発展させたものとしては、マイクロフィルムへの資料の収録事業が挙げられ、2005 年まで継続された。この事業の一貫として、警視庁音楽隊が所蔵する旧陸軍軍楽隊の楽譜もフィルムに収められた。警視庁音楽隊の協力を得て 1993 年に調査が開始され、1999 年に撮影開始、国立音楽大学附属図書館との共同事業として進められたこのプロジェクトは、ダグロンを迎えて教導団が創設された明治 4 年から軍楽隊長永井建子が退任した大正 4 年までの間に購入、または写譜によって製作された楽譜に、どのようなレパートリーがあったのか、どのような楽譜だったのか、音楽館でその一端を閲覧することが可能となった。

2001 年には上向きスキャナを導入してスキャンニングを開始し、画像の収録方法はフィルムからスキャンデータに取って代わった。この頃には、作品資料を借り受けて撮影することは少なくなり、所蔵資料のスキャンニングが主体となっていた。

また、日本近代音楽財団の日本近代音楽館で大きく成長したものに、演奏会プログラムのコレクションがある。さまざまな方の協力を得て所蔵資料数が格段に増えるとともに、当初の紙のリストがデータベースに変換されて、2002 年より館内の端末で利用者自身が検索ができるようになった。

以下に簡易年表を掲載する。

1962　遠山音楽財団設立（小宮豊隆理事長）
1966　附属図書館開室（遠山一行室長、平島正郎副室長、皆川達夫副室長）
1967　山田耕筰資料受け入れ
1969　日本人作曲家の作品資料のマイクロフィルム収録事業、検討開始
　遠山財団附属図書館に改称
1970　遠山現代音楽研究所設立、文化庁の助成交付をうける
　マイクロフィルム収録作業開始
1971　深井史郎資料受け入れ開始
1972　橋本國彦資料
1973　早坂文雄資料
1981　遠山現代音楽研究所への助成金打ち切り
1984　近代音楽館設立準備会発起人会開催、「近代音楽館を設立する会」発足
1986　日本近代音楽財団発足
1987　日本近代音楽館開館（遠山一行館長、皆川達夫副館長）
　第 1 回奏楽堂特別展開催
1989　「新聞記事にみる日本の洋楽 明治篇」プロジェクト開始
　「日本のオペラ・管弦楽作品演奏用楽譜」所在調査事業開始
1997　「新聞記事にみる日本の洋楽 明治篇」館内公開開始
2000　旧陸軍軍楽隊明治期楽譜（スコア篇）マイクロ収録終了
2001　資料のスキャンニング開始
2002　演奏会プログラム所蔵データベース公開
2009　「日本の管弦楽作品演奏用楽譜」所在調査作業開始
2010　「日本の管弦楽作品演奏用楽譜」所在調査作業終了

閉館直前の日本近代音楽財団の日本近代音楽館がどのような団体だったかは、当時の案内書で概要を知ることができるので引用する。事業の 4 つの柱とその内容が端的に示されている。

1．資料の収集・保存・公開

明治以降の日本の洋楽にかんする資料を収集、保存し、一般に公開しています。おもな収蔵資料は下記の通りです。

① 楽譜、図書、雑誌、録音資料（SP、LP、CD）などの出版物

② 山田耕筰、橋本國彦、芥川也寸志、武満徹をはじめとする作曲家の自筆楽譜や初版譜、原稿、初演記録などの関係資料、大田黒元雄、富樫康など研究・評論家の蔵書、および安川加壽子、岩城宏之等演奏家の活動記録を収めた記念文庫、コレクション
③ 作曲家の自筆譜を中心とする館外所在の作品資料を収めたマイクロフィルム（当館製作）
④ 明治期より今日に至る国内演奏会のプログラム

2. インフォメーション・センター

日本近代音楽館は、日本の近・現代音楽の資料情報を提供する「インフォメーション・センター」でもあります。国際音楽情報センター協会(IAMIC: International Association of Music Information Centres)のメンバーとして、国内外の照会に応じています。

国内資料情報収集の一環として、「日本のオペラ・管弦楽作品演奏用楽譜所在目録」が作成されています。ご希望の方はお問い合わせください。

3. 日本近代洋楽史の調査・研究

幕末・維新期に始まる日本の近代洋楽史の諸相を把捉するための事業の一つとして、「明治の洋楽」データベースがあります。明治期の新聞（外字紙を含む）に報道された種々の洋楽関係記事の解析を通して、わが国における近代音楽の生成過程を明らかにしようとするものです。収集された記事はおよそ 6 万点。現在それらの記事の索引をデータベース化する作業が進められています。

4. 行事の開催

特別展「日本の作曲家シリーズ」をはじめとして、日本の近・現代音楽にかんする展覧会、演奏会、講演会などを開催しています。

前身団体から引き継いだもの–「今」の音楽館でできること

2010 年 3 月に日本近代音楽財団の日本近代音楽館は閉館し、7 月に資料を明治学院に移送、2011 年 5 月にオープンした。資料はおおむね引き継いでいる。館報最終号に書かれた記念文庫・コレクション数は 128、移管後から現在までに新しく設置された文庫・コレクションは 15、返却が 1 件あって、現在の文庫数は 142 となった。

引き継がなかったことは、閉館とともに退会扱いとなった IAMIC に再加盟をしていないこと、明治学院大学の創立 150 周年の記念事業として音楽館のお披露目を兼ねた 2013 年の展覧会を除き、展覧会開催を取りやめたことなどである。かわりに、主催行事としてレクチャーコンサートを行うようになった。

明治学院に移ってからの大きな変化は、ホームページができ、OPAC がウェブ公開されたことである。館内限定だった OPAC のシステムはサポート終了後数年を経過して更新が必要になり、2012 年に Toccata のシステムへの移行を決定した。2015 年に館内公開、2017 年に Web 公開を果たした。

利用案内上の変化にも少し触れておこう。以前の音楽館は週 5 日開館であったが、現在は木・金・土の週 3 日開館である。また、以前は予約不要であったが、現在は予約制を取っている。

現在進めていることをふたつご紹介する。ひとつはマイクロフィルムの pdf 化である。ただ、古い手書きの楽譜はマイクロ撮影の際とデジタル化の際の両段階で濃度調整の問題がおこって読めない部分が生じる場合がしばしばある。すべてのコマを点検することは現実的ではないため、現時点では、利用者には従来通りのマイクロフィルムでの利用としている。

もうひとつは、「明治の洋楽――新聞記事にみる日本の洋楽」データベースである。明治学院に移管後も閲覧室端末で公開していたものの、入力作業は中断していたが、以前に携わっていた森本氏の協力を得て、2023 年度より入力作業を再開させた。このデータベースは、索引語（原文通りの表現と統制された表現の 2 種）、件名などのフィールドを備え、新聞社自体が作るデータベース等で検索からこぼれてしまう記事も、また広告や欄外のデータも検索できるという特徴をもつ。進捗状況は館報などで報告していきたい。

変わらず直面し続ける難題

過去から引き継いだもののなかには難題もある。音楽館の所蔵資料、収集対象は、刊行物以外の特殊な資料を多く含んでいる。手稿譜はそのひとつで、刊行物でない資料は、タイトルが書かれていなかったり、いくつかの作品が混ざっていたり、表紙と内容（箱と中身）がちぐはぐであったり、ページが振っていないうえにばらばらな順番に重ねられた詳細不明の楽譜束があったりするので、頭を抱えることは日常茶飯事である。そのコピーも曲者で、コピーが普

及してからの作曲家はさまざまな理由で複数のコピーを作るため、どこかに重要な書き込みや修正があるのか、ただの増し刷りか、瞬時に判断できない。扱いが難しくて整理に時間がかかる数多の資料に囲まれているのに時間が足りないことは、ずっと突きつけられ続ける難題のようだ。

さらに、特別文庫の資料は、旧蔵者の傾向や癖、またその資料に対する心情や、封筒などに収めたときの考えを斟酌しながら整理を進める必要がある。画一的なやり方が通用せず、それぞれにアジャストしなくてはならないところがある。一例を挙げると、複数のヴァージョンやコピーが残っている楽譜のうち、作曲者の考える最良の決定版が、消しゴムを使った修正が施されているかもしれない鉛筆書きの直筆版なのか、赤字が入ったコピー版なのか、演奏用の書き込みも音符等の修正も入った版なのか、あるいは全てを見比べなくてはならないのか、という判定は、総合的にその人の資料を見ないと難しい。充分な吟味を経ないで推論を行って利用者をミスリードしてはいけないので、複数の楽譜があれば利用者自身に判断していただくことを原則としている（遠方からの演奏用コピーの希望者などは、こちらでの判断が可能かどうかを見極めたうえで目的にふさわしいと思われるコピーを提供する場合もある）。

活動中の作曲家の文庫資料は、いったん収められた楽譜の訂正等の要望にも対応しなくてはならないことがある。寄贈者自身の控えリストによって、いつ寄贈した何番めの資料を出してほしい、などと要請されることもあり、このようなケースでは館として番号をつけ直したり、種別ごとに分離したりするのを控えるか、注意深くなんらかの解決策を見出すか、よく考える必要がある。

人それぞれに合わせた最適解は、先人たちの試行錯誤から得られた知恵と、自らの経験の積み重ねをもとにして見つけ出していく以外に方法はないように思われる。

利用者のニーズの変化への対応

●オンラインデジタルアーカイヴ構築の可能性

オンラインデジタルアーカイヴの要請はますます強くなってきていると感じる。インターネットで膨大な資料が閲覧できるのが当たり前と捉えられるなか、音楽館もこれに沿うべきだ、との考えが広がっていると思われる。しかしながら、オンラインのデジタルアーカイヴは権利関係をクリアすることが難しく、国あるいは潤沢な資金源をもつ大きな組織でない限り、不可能と言って良さそうだ。著作権の切れた著作者の作品であれば少し可能性は出てくるものの、システムの構築や目録の整備などを行う余裕は残念ながらなく、いずれにしても実現は難しいと言わざるを得ない。

●OPAC に入っているデータが限られている事への不満

マイクロフィルムや自筆譜等の所蔵について、OPAC で検索できるようにしてほしい、という要望もしばしば寄せられる。しかしながら、どんなに IT の技術が進歩しようとも、スケッチなどを含む手稿譜のなかに、目録を作るのが難しい資料が数多くあることに変わりはない。現在使用している Toccata-MARC エディターシステムは、手稿を含む幅広い種類の資料の記述を前提に設計されているが、音楽館では現在のところ、残念ながら、手稿譜をこのシステムに載せる予定をたてることができない。

ただ、具体的にお問い合わせいただければ、誠意をもってお探し申し上げるようにつとめていることはお伝えしておきたい。これは前の音楽館から、ポリシーとして受け継いだ姿勢である。

●研究者の裾野の拡がりとその要求の変化

近年、当館の専門とする範囲の分野で学位論文をはじめとした論文を書こうとする人が、さまざまな年代にわたって、学際的な方向にも、また外国にも広がっている印象がある。歓迎すべきことであるが、しっかりした手順で研究を進めている研究者ばかりではないようだ。当館所蔵の手稿資料のリストの閲覧を希望してくる利用者のなかに、論文のテーマを定めたあと、先行論文の探索を経ているかどうか、怪しまれるような学生等も、ちらほら見かけるようになっている。閲覧用リストがある場合にはそれをお見せするが、そこから、カタログ販売のように、興味のありそうなものを大量に注文するような感覚の持ち主も見受けられる。貴重資料を扱うアーカイヴとしては、必要のないコピーを出回らせるのは避けたいし、いずれ使えるかもしれないから多めに頼んでおこうという、当面使う当てのない、備蓄が主目的のコピーはなるべく謹んでいただきたいと考えている。

閲覧用のリストができていない場合でも、作品を特定していただければ資料をお探しして閲覧していただいてきたが、この方法を提案しても、どんな作品を見たいのかが全く定まっていない利用者（多くは学生）も増加傾向にある。「リストがなければ何があるかわからない」と詰め寄られたこともある。確かに、リストは作ってあるべきものだが十分に手が回っていないのは事実で、心苦しい思いをすることになるのだが、珍しいものを発掘

して、それを発表するという野望をもって論文に臨んでいる人なのかもしれないという想像も生まれる。もしそうであったなら、その利用者が適切な論文指導を受けられることを祈るのみである。

また、「何々関係の資料を見たい」という大ざっぱな要望もよく受ける。そのテーマの論文を書くのに必要な参考図書や雑誌、手稿譜等を、かゆいところに手が届くように取りそろえたキットが用意できれば確かに便利であろうが、今後もこの夢のようなリクエストには応じかねる。

●言説研究の一般化

研究対象者の日記や手記のようなもの、および手紙のみに的を絞った問い合わせが増えている感覚もある。以前もなかったわけではないが、以前と比べると、研究の入口に立ったばかりと思われる時期の利用者が、まず作曲家等の日記と手紙の有無を問い合わせてきて、しかも楽譜を含むほかの資料にはほとんど興味を示さない、という事例が増えているように感じる。この傾向は、1990 年代ごろから注目され始める言説の研究が徐々に一般化し、言説を作品研究の周辺にあるものとするのではなく、研究の主役にしようとする人たちが増えていることを示すのではないかと推測している。書籍や雑誌等、公刊されたもので言説を研究することには何の問題もないが、日記や手紙といった私的な資料については、当館では、配慮の足りない無責任な公開にならないよう、慎重な対応を心がけている。プライヴァシーを保護する時代に変わってきたという背景もあり、旧音楽館時代よりも一層、注意する必要が生じていると言える。

旧音楽館の館報でも、日記などの文字起こしをして、抄録として掲載していたことがあるし、貴重な証言があることは確かだが、関係者が公開してほしくないと思うような内容がないことを確認してから公開する、という手順を踏む必要があると考えている。

音楽館の立場

当館は、多数の文庫資料を所蔵している。それはつまり、私的な資料の寄贈者やその遺族と向き合っているということであり、それらの方々の意向は研究者の希望と対極にあることもある。数人の作曲者の話をきいた経験上、作曲家本人は完成版の作品だけを見て欲しいと思っていることが多いが、研究者は作品の成立過程を掘り下げたいので、言説やスケッチ等、作曲者が見て欲しくないものをこそ「発見」して、自らの手で公表したいと思うものだろう。音楽館は両者の板挟みとなっているが、学問の発展と人権への配慮とを天秤にかけると、著作者サイドに寄り添う結果となる。デリケートな資料を公開しない音楽館やご遺族に対して、研究を阻害するものだと非難する声に対しては、これまで、理由を説明する必要があるとは考えてこなかったが、せっかくの機会なので立場を表明してみることにした次第である。

これからの展望

前身の音楽館から引き継いできた方向性とノウハウによって、開館後 10 年以上を過ごして来た。連綿とルーティンワークを続けながらも、とりまく環境の変化に適応していかなければならないことが必ずや出てくるはずである。今まで慎重な対応を心がけていた部分については、法律の専門家や他分野や他の組織、有識者などのご意見を伺いながら、検討していかなくてはならないと考える。常に当館の立ち位置を意識しつつ、周囲の理解を得られるように心がけることも必要かもしれない。

参考文献

『遠山音楽図書館の二十年 : 1966〜1986』（1988）

『日本近代音楽館館報』第 41 号（2010）

（末永（すえなが） 理恵子（りえこ））

明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

【傍聴記】

はじめに

2025 年 3 月 1 日、国際音楽資料情報協会（IAML）日本支部の第 76 回例会が開催され、「明治学院大学図書館付属遠山一行記念 日本近代音楽館の今とこれから」をテーマとした講演が行われた。講演を担当したのは、同館職員の末永理恵子氏である。明治学院大学図書館付属 遠山一行記念日本近代音楽館（以下、日本近代音楽館）は、日本の近代・現代音楽を専門とする資料館である。例会資料によれば、「2010 年 7 月、日本近代音楽財団より蔵書、資料の寄贈を受け、研究・教育支援を通じて音楽文化の振興に寄与することを目的に 2011 年 5 月、明治学院大学図書館の付属機関として開館した」とされている。筆者は以前より、日本近代音楽館を、日本の作曲家の作品を研究する上で欠かせない情報拠点として認識していた。今回の講演は日本近代音楽館に在職する職員の視点から、同館が行っている活動

を、過去・現在・未来と、時系列ごとに知る大変貴重な機会であった。同じく音楽資料を扱う図書館に勤務する立場として、音楽資料の保存や取り扱いの難しさと重要性を改めて感じるとともに、利用者のニーズに応えるための整理やサービス提供には共感する点が多かった。この傍聴記では、日本近代音楽館が日本の近現代音楽における重要な情報拠点であることについて、所蔵資料の一つである楽譜に注目しながら、筆者が所属する図書館の「収集」「保存」「整理」「提供」という機能の観点から考察していきたい。

収集

日本近代音楽館では、明治以降の日本の洋楽に関する資料の収集・保存・公開を、事業の柱の一つとして行っている。楽譜、図書、雑誌、録音資料（SP、LP、CD）といった出版物をはじめ、作曲家の自筆楽譜や初版譜、原稿、初演記録などの関係資料、さらには研究者・評論家の蔵書に至るまで、幅広い資料の継続的な収集と保存に努めている。これらの資料はどれも調査や研究にとって貴重なものだが、ここでは作曲家の自筆楽譜に注目したい。というのも、自筆楽譜には出版された楽譜には見られない情報が含まれているからだ。出版譜は、演奏や楽曲分析のための資料として十分に機能するが、自筆譜には作曲家独自の筆跡や書き込みが残されており、作品が完成するまでの過程や、作曲家の個人的な側面を垣間見る手がかりになる。そのため、日本近代音楽館では楽譜を収集する際、たとえコピー譜であっても一点一点を人の目で確認し、書き込みを含む内容の違いがないかを慎重に精査しているという。これは非常に手間のかかる作業だが、機械では捉えきれない、人間ならではの感覚と判断が求められる重要な工程である。そもそも、自筆楽譜の中には出版されずに終わった作品も少なくない。そう考えると、この収集活動は作曲家にとって大切な楽譜の散逸を防ぐと同時に、将来の作曲家や研究者にとってもかけがえのない情報源となるのだ。

保存

日本近代音楽館における楽譜の保存は、館外所在の作品を含め作曲家の自筆譜を中心にマイクロフィルムに収録するという方法で作業が開始された。マイクロフィルムへの収録は館内で行われた。その際、公開されていない他館書庫保管の楽譜も借り受けして撮影を行っていたとのことだ。マイクロフィルムでの保存が計画された理由はいくつかあるが、特に注目すべきは、作品研究において自筆原稿が第一次資料として極めて重要である点だ。「収集」の項目でも述べたように、出版譜だけでは創作の実態を明らかにすることは難しい。現在では、こうした貴重な資料を写したマイクロフィルム資料をデジタル化する取り組みが進められている。

ただし、ここで楽譜特有の問題が浮かび上がる。たとえば、自筆譜に鉛筆で薄く書かれた部分がスキャンでは判別できなかったり、五線が薄い場合は音符しか映らず、音高が読み取れなくなることがある。五線が見えなければ正確な音が分からず、音楽作品としての情報が不完全な状態で保存されてしまう。このため、デジタル化された譜面と元のマイクロフィルムを突き合わせて、欠落がないかを一点ずつ丁寧に確認する作業が必要となる。もしデジタル化された譜面に情報の欠損が見つかった場合、それをもってマイクロフィルムを置き換えることはできない。その結果、現時点では自筆譜の閲覧や提供において、マイクロフィルムが依然として中心的な手段となっている。これは非常に悩ましい課題ではあるが、10 年後、50 年後を見据えたとき、どのような形であれ作品を知る手がかりが残されていることには大きな意義がある。なぜなら、将来何かのきっかけで過去の日本の作曲家が再評価される場面があったとしても、楽譜が失われていれば再演の機会さえも失われてしまうからだ。日本には、まだ広く知られていないが、もっと評価されるべき作品が数多く存在している。筆者の願いとしては、そうした作品がいつか日の目を見る時、日本近代音楽館に保存されている資料の価値が改めて見直されることを期待している。

整理（*）

日本近代音楽館では、収集・保存された資料を広く利用者に公開している。資料は、単に保管しているだけでは管理が煩雑になるだけでなく、必要な情報を見つけることが困難になる。そのため、収集された資料は所蔵資料として整理され、目録作業を通じて管理されている。所蔵目録が整備されていることで、資料を分類ごとに配架したり、OPAC（オンライン蔵書目録）を通じて所蔵状況を検索したりすることが可能となる。利用者が必要とする情報にたどり着くためのナビゲーションとして、目録は欠かせない役割を果たしている。

また、日本近代音楽館では所蔵資料の目録作成に加え、日本の作曲家の作品目録の編纂にも取り組んでいる。こうした作品目録は、作曲家の研究にとって極めて有用な資料である。たとえば、特定の作曲家の作品を年代順に追うことで創作の変遷をたどることができるほか、オーケストラ

作品やピアノ作品といったジャンル別に分析する際にも活用できる。

講演の中で特に印象に残ったのは、この目録作業を支える作業環境の変遷についてである。かつては、手書きのカード目録や原簿への記入から始まった作業が、IT 環境の発展により WebOPAC 対応のオンライン目録ネットワークへと移行していった。しかしながら、日本近代音楽館で使用されていた目録システム「LS/1」は、サービスの終了に伴い、保守やバージョンアップが不可能となるという課題に直面した。その後、目録情報は LS/1 と構造が類似する「Toccata-MARC」へと移行され、現在では WebOPAC として公開されている。こうした IT 技術の進展とそれに伴う環境の変化は、いつどこで起きても不思議ではない。今回の講演を通じて、情報整理や保存の作業が、時代の変化に即して更新され続けなければ維持できないものであり、そこには多くの人的労力と工夫が注がれていることを、改めて実感した。

利用者提供

日本近代音楽館では、現在も研究や調査を目的とする利用者に対し、所蔵資料の公開を行っている。これにより、過去の音楽作品に触れる貴重な機会が提供されている。所蔵資料の中には、未出版であり、録音の記録も残されていない作品も含まれている。こうした作品の存在が今もなお確認できることは、作曲家にとっても極めて意義深いことであろう。というのも、作曲家にとって自身が創作した楽曲は、演奏されて、誰かに聴いてもらって初めて本当に完成するものと考えられるからである。

一方で、講演でも言及されていたように、作曲家本人やその遺族の意向を考慮すると、すべての資料を無条件に公開するわけにはいかない事情もある。そもそも、出版前の手書きの楽譜や創作ノート、メモといった資料は、本来私的なものであり、公開を前提とせずに記されたものが多い。そのため、作曲家の個人的な側面に深く関わる資料については、慎重な取り扱いが求められる。

研究者の立場からすれば、作品が完成するまでの過程を明らかにするために、日記や書簡といった私的資料にアクセスしたいという要望がある一方、作曲家やその遺族からは「完成した作品のみを見てほしい」「日記や手紙は公開したくない」といった意向がある場合も少なくない。そうした中で、日本近代音楽館が、利用者と作曲者（遺族を含む）の板挟みとなり、苦しい立場に陥る可能性があると感じさせられた。

それでもなお、双方にとって納得のいく形での情報提供を継続していこうという日本近代音楽館の姿勢に、改めて情報拠点としての重要性を再認識させられた。

結びに

ここまで、今回の講演内容を、「収集」「保存」「整理」「利用者提供」という図書館の基本的な機能に着目しながら振り返ってきた。日本近代音楽館が日本の近代・現代音楽にとって極めて重要な情報拠点であることを、改めて確認することができたと考える。特に、過去から受け継いだ資料を大切にしつつ、現在の課題に誠実に向き合い、未来の作曲家や研究者に向けて「情報」というかけがえのない財産を残していこうとする姿勢には、深い共感を覚えた。私事ながら、かつて作曲を志していた筆者にとって、日本の作曲家に関する情報を発信するこのような拠点が存在することは、大きな意義を持つものである。今後、このような施設が全国に広がり、相互に連携し合える環境が整備されていくことにより、日本の音楽文化の価値がさらに高まっていくことを期待したい。

(*) この箇所の内容については、講演の中で紹介されていた以下の記事を参考にした。 森本美恵子「音楽資料の収集と組織化：日本近代音楽館の場合」『現代の図書館』vol. 60, no. 1, 2022, 28-34.

（都丸（とまる） 敦史（あつし））

IAML フレンズ会員

事務局だより

○IAML 年次大会案内
期間：2025 年 7 月 6 日〜11 日
開催地：ザルツブルク大学人文学部で対面で開催
ウェブサイト：www.iaml2025.at（リンクは外部です）
連絡先： office@iaml2025.at
日本支部派遣：伊藤真理氏（愛知淑徳大学）

○第 77 回例会案内
日時：2025 年 10 月 18 日（土）14:00-16:00（講演 90 分、質疑 30 分）予定
開催方法：オンライン（Zoom）

テーマ：曲がり角を迎える図書館の目録について（2）
「IFLALRM と今後の目録の行方」
講師：木村麻衣子氏（日本女子大学文学部）
内容：2017 年に発表された IFLA 図書館参照モデル（IFLA LRM）は、エンドユーザーが情報を得るために必要なデータと機能を主な対象とする利用者志向の新しいモデルです。今後、このモデルが図書館の目録の行方にどのような影響を及ぼしていくかについて米国の大学図書館の事情も踏まえ講演いただきます。
定員：80 名
対象：支部会員、フレンズ及び非会員
参加費：1,000 円（支部会員およびフレンズは無料）

〇会費納入のお願い

・IAML 日本支部の年度は、IAML 本部の年度に合わせて毎年 1 月から 12 月までとしています。また、毎年、IAML 本部に送金する IAML 支部の翌年分の会費の期限が当該年度の 2 月末までとなっていますので、日本支部の会費納入のお願いが年度末近くになっています。このことをご配慮いただき、ご協力いただけますようよろしくお願い申し上げます。
・会費納入の依頼は例年 10 月半ばから 11 月初旬、締切は 12 月末日です。
・今年度も例年通りに、2026 年度（2026 年 1 月～2026 年 12 月）の会費納入の書類を送付予定です。支部の円滑な運営のため、できるだけ早い時期の納入にご協力を賜りますようお願い申し上げます。
・お問い合わせは、会計・野川（nogawa★tohomusic.ac.jp;メール送信の際は★を@に変えてください）までお願い申し上げます。

〇ニューズレターの公開

77 号（2023 年 11 月 20 日発行）よりニューズレターは、発行後 1 年間は「支部会員およびフレンズ」のみが閲覧可能なよう、運用が変更されました。一般公開は、刊行後 1 年を経たものから順次行われます。刊行から 1 年に満たないバックナンバーを閲覧の際には、本支部ホームページの専用ページにアクセスいただき、事務局から会員宛に通知されている ID、パスワードを使っていただくことになります。よろしくお願い申し上げます。

〇『図書館年鑑』2025 年版への情報提供

音楽図書館協議会から日本図書館協会発行の『図書館年鑑』2025 年版の項目「音楽図書館」への情報提供依頼があり、加藤日本支部副支部長が本支部の項目について原稿を提出しました。

〇『音楽文献目録オンライン』の利用について

IAML 日本支部会員が『音楽文献目録オンライン』を利用するためのパスワードは毎年更新されております。新しいパスワードは 2025 年 4 月 1 日に会員のみなさまに送信されました「『音楽文献目録オンライン』パスワード更新について」というメールをご覧ください。

〇新刊『音楽資料目録入門』について

伊藤真理会員（愛知淑徳大学）と鳥海恵司会員（(株）トッカータ）がこのほど、樹村房から『音楽資料目録入門—NCR2018 による記述の実際』（ISBN978-4-88367-402-2）を出版されました。この図書は音楽図書館の専門家に限らず図書館業務に関わる方を広く対象とした音楽資料目録についての入門書となっています。

Newsletter - 国際音楽資料情報協会日本支部
第 80 号
（2025 年 6 月 30 日発行）
国際音楽資料情報協会（IAML）日本支部
〒182-8510　東京都調布市若葉町 1-41-1
桐朋学園大学附属図書館内（担当：田中）
https://www.iaml.jp